

平成二十二年 度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十三年三月

社団法人 高山市文化協会

序

平成二十二年度、高山市から委託を受けた「高山市近代文学館調査・研究」については、故中舎高郎氏の著書「飛騨の文学碑遍歴」に著されている俳句・短歌・詩・記述等々の文学碑を、より多くの市民の皆様にご理解いただくことを念頭に、碑文の作者はもとより、碑に刻まれた文学者・国学者・碑を製作した石工等、文学碑の背景に現れる人物・組織についても調査しました。調査の結果は十分ではありませんが、これから誇り高い郷土の文学について引き続き調査と研究を行い、郷土の文学の振興に尽くしてまいります。今年度実施しました成果を、ここに報告書としてまとめました。

社団法人 高山市文化協会

会長 小鳥 幸男

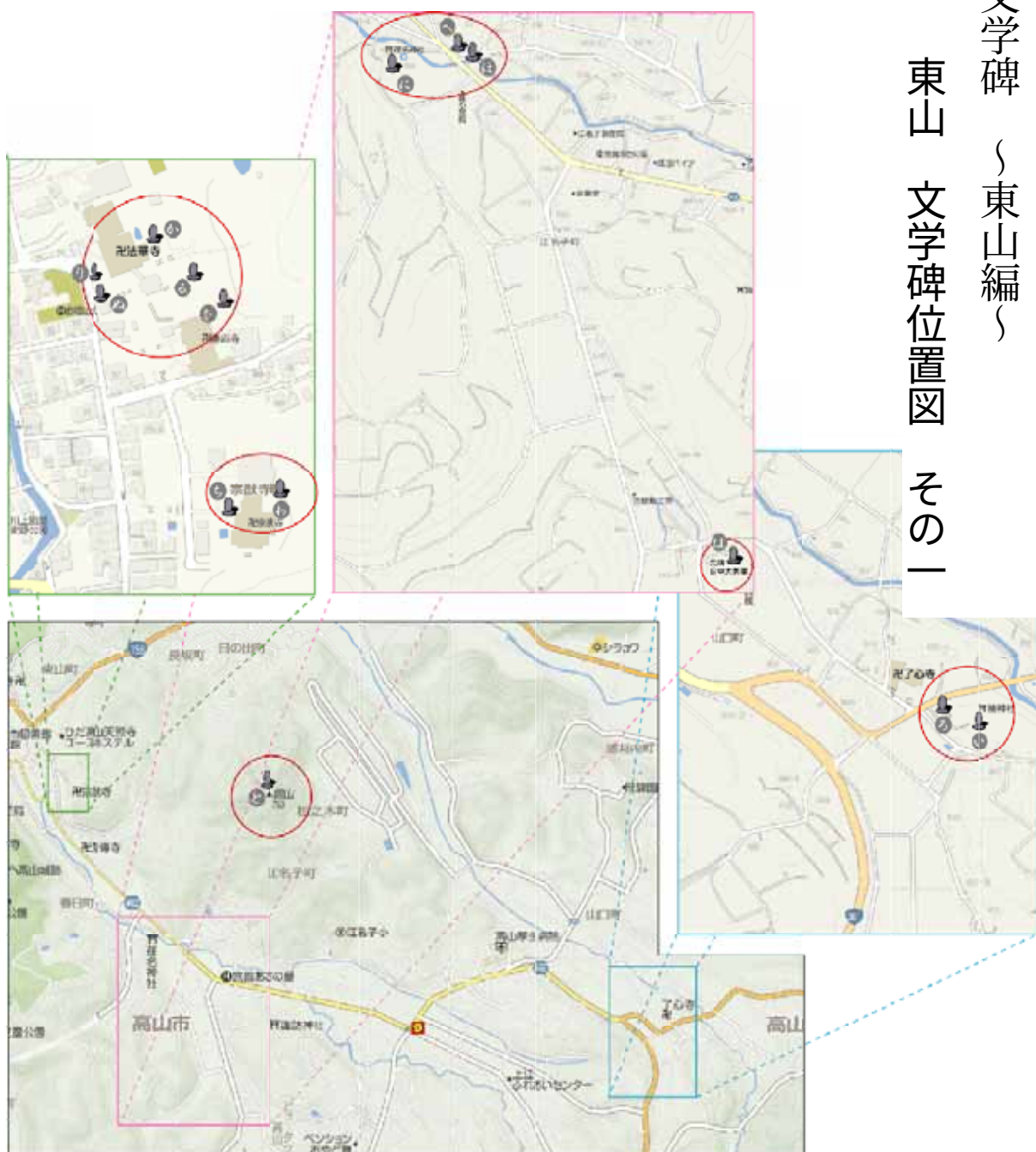
目次

一、郷土の文学碑　　（東山編）	1	（ス）本名不明の墓	34
（ア）東山　文学碑位置図　その一	1	（セ）上木雨夕墓	35
（イ）姉小路基綱卿懷旧碑	2	（ソ）楠木・三原夫妻碑	37
（ウ）大秀歌碑	5	（タ）東山　文学碑位置図　その二	39
（エ）田中大秀墓	8	（チ）贈川尻翁漢詩碑	40
（オ）大秀大人之碑	11	（ツ）大原彦四郎墓	42
（カ）道分灯籠	16	（テ）杉原屋平八墓	44
（キ）田蓑の碑	18	（ト）清水久六墓	45
（ク）錦山沿革碑	20	（ナ）都竹しめ路墓	47
（ケ）吟風句碑	22	（ニ）貝塚素牛墓	48
（コ）松浦家墓	25	（ヌ）赤田氏三代墓	50
（サ）加藤家三代句碑	27	（ネ）保谷正葉句碑	55
（シ）加藤千歩句碑	32	（ノ）森遷齊夫婦墓	57

(ハ)	土屋英世墓	59
(ヒ)	西部露江墓	61
(フ)	指田孝暢、孝勝墓	63
(ヘ)	瀧井孝作(新三郎)墓	65
(ホ)	瀧井孝作句碑	66

一、郷土の文学碑（東山編）

（ア）東山 文学碑位置図 その一



- 【楠神社界隈】
い 姉小路基綱御懐旧碑
ろ 大秀歌碑
- 【史蹟 田中大秀墓】
は 田中大秀墓
- 【錦山界隈】
と 錦山沿革碑
- 【荏名神社界隈】
に 大秀大人之碑
は 道合灯臺
へ 田養の碑
- 【宗猷寺界隈】
ち 吟風句碑
わ 松浦家墓
- 【法華寺界隈】
り 加藤家三代句碑
ぬ 加藤千歩句碑
る 本名不明の墓
を 上木雨夕墓
か 楠木・三原夫妻碑

(イ) 姉小路基綱卿懷旧碑



山 口 懷 舊 碑

從二位權中納言姉小路基綱卿

おく深く花をあつぬる

あけぼのに山くちしるく

雲ぞかをれる

(以下次ページ)

山口町地内に花之木公園があり、元来シロヤマ（白山）と呼ばれ、白山神社があつたが、今は東方にある八幡神社のお旅所になっている。
その丘の北隅に、姉小路基綱が詠んだ飛騨八景の歌の一つを刻んだ碑が建っている。
石は、山口溪谷の奥から搬出して来た。明治二十六年（八九三）地元民の要望で建立された。

飛驒国大野郡山口村古称山口郷地多櫻樹以名勝聞文亀之初權中納言姉小路基綱為国司擇境内勝地八所賦国風各一首山口即其一也飛驒文化之開蓋肇於此歲久蕪廢其名僅存明治中官并合数村統称大八賀村於是又將并其名而漸就湮沒邑人慨焉乃相議建石其地属大教正本居豐額書基綱遺製以表追慕之意并永後人之思予因記其梗槩如此

明治廿六年四月

文科大學教授從五位大學博士

島田重禮撰

正二位侯爵

久我通久題額

正五位

日下部東作書

岡田廣次鐫

あねがこうじもとな

【姉小路基綱】 嘉吉二年（二四四） 九月十一日生、永正二年（二五〇四） 四月二三日没

飛驒国司。姉小路家は室町時代飛驒の国司に任じられ、現在の古川盆地を中心に勢力があったが、後に三家に分立した。古川家の基綱は歌人として名高く、姉小路歴代の中で最も知られている人。明応二年（二四九三）一月従二位権中納言。

和歌を飛鳥井雅親や宗祇に学び、寛正六年（二四六五）和歌所寄人となり文明以後は宮中・摂関家・将軍家の詩歌会に参列することが多かった。姉小路家には秘伝書が伝えられ歌道の名家であった。雪玉和歌集に多く記載され、家集「卑懷集」「基綱卿集」がある。

明応八年（二四九九）十二月下旬、基綱は都を離れ、老母や女子供を伴って飛驒へ下向。永正一年（二五〇四）閏三月十六日に念願の権中納言に任ぜられるが、同年四月に古河郷で没する

【飛驒人物事典】

おかだひろつぐ

【岡田廣次】

生年不詳、明治三五年（一九〇二）十一月没

石工。古川の人で晩年高山に移る。勝蔵と称する。信州の石工・藤本宇兵衛に学ぶ。碑銘の鉄毫運刻の名手。高山県知事の梅村速水の顕彰碑を彫る。享年八一歳

【飛驒人物事典】

(ウ) 大秀歌碑



田中大秀

わけゆかむ

むらを

いく重にしらくもに

にほひそ知うる

花の

やまくち

〇〇 富田令禾書

山口町地内に花之木公園がある、その登り道左側の北向きに安山岩でつくられた円形の碑がある。

田中大秀の「飛騨十詠」の中の一詩であり、文化十二年（一八五五）ころの作品とされている。昭和三十三年（一九五八）に山口町保存会の建てたもので、富田令禾の書になっている。

たなかおひで

【田中大秀】

安永六年（一七七七）八月十五日生、弘化四年（一八四七）九月十六日没

国学者。高山市下一之町の薬種商に生まれる。通称は弥兵衛・平之丞。号を紀文。後に大秀と改める。別に八月満・湯津香木園、晩年は荏野翁・荏野老人・三酉。自庭を千種園と呼ぶ。

幼より読書詠歌を好み栗田知周、伴蒿蹊らに学ぶ。享和一年（一八〇一）本居宣長の門に入り、没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初て国学を伝え、多くの門人を擁した。

敬神勤皇の念篤く、文政一年（一八一八）に荏名神社、同四年（一八三三）に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。大正四年（一九一五）御即位の大典に当たり正位。

著書「竹取翁物語解」「養老美泉弁」「荏野刷子」「土佐日記」他。

【飛騨人物事典】

【富田令禾】

とみたれいか

明治二六年（一八九三）四月十三日生、昭和六十年（一九八五）五月二九日没

日本画家。郷土史家。高山市八軒町一の人。本名は稔彦。初号を位峰。

斐太中学、京都絵画専門学校卒業。菊地契月に師事。京都市展に六回入賞。昭和二十年（一九四五）帰郷。山岳風景画家として知られる。

角竹喜登による「高山市史」や町村史の編纂に資料を提供するなど協力した。昭和二二年（一九四七）福田夕咲らと「道づれ吟社」を結成。当時の飛騨における代表的な文化人とされる。

著書「飛騨の伝説」上下、「飛騨の高山」。高山市芸術文化顕彰（昭五一（一九七六））

【飛騨人物事典】

あわたともちか

【粟田知周】

生没年不詳

国学者・尾張熱田神宮の神職。号は培根堂。字は済夫。宝暦（二七五）から天明（二七六）ごろの人。田中大秀は二十一歳の時に知周に師事。寛政十一年（二七九）には大秀を伴い冷泉家の歌会に列席。著書「椀鳴声」。

【飛騨人物事典】

ばんこうけい

【判蒿蹊】

享保十八年（二七三）十月一日～文化三年（一八〇六）七月二五日

歌人・和文作家。幼名は富二郎。名を資芳。号を閑田子・閑田廬。晩年薙髪して繰山と号する。京都三条の豪商・判弥兵衛家に生れる。

加藤歩簫、田中大秀の師。

千光寺の立木仁王を彫刻した円空を扱った「近世畸人伝」は代表作。（日本歴史人物辞典）

【飛騨人物事典】

(エ) 田中大秀墓



(右側面)

歳六十二に成ける天保九戌戌年九月十日ここを

墓所とし^だため松室岡と名づけて 荏野翁

今日^{きょう}よりは我まつむろに蔭しめて

千代
ちよのみどりを友とたのまむ

田中大秀は、生存中に、松室岡を墓所と定め、歌まで作っていた。
江名子町の最西の谷の奥、上使畑の丘である。S状に曲った坂を登ると、正面奥に墓がみえる。
燈籠が立っている。
少し下がった左の碑は贈位記念碑である。

(左側面)

大人の歌を聞いて言ほきけらく^{うし}

いまよりは千代のあるしと松枝のあせぬ翠の^主

色にあえませ 又後世人にいはまほしくてよめる^言

こころあらは植はそふとも我大人のしめいます^占

木立きりなあらしそ 山崎弘泰

(裏面)

弘化四年丁未九月十六日没

嘉永三年庚戌九月

田中弥兵衛壽豊建

やまざきひろやす

【山崎弘泰】

生年不詳／文久一年（一八六一）一月二日没

高山の地役人・国学者。幼名は君泰。通称は十郎右衛門。号を蛭園・花里翁・鯉斎。

田中大秀に学び国典を修め歌文に長ずる。高山の地役人で天保十三年（一八四二）頭取に進む。弘化四年（一八四七）二月に田中大秀の文机を継ぎ荏門の学頭となる。後に花里村天満宮境内に花里文庫を設け、大秀の遺稿と蔵書を移して保管。

著書に「蛭園集」「高原日記」「山分衣」「蛭園雑考」等。享年六六歳

【飛騨人物事典】

(才) 大秀大人之碑



国学者田中大秀の功績を讃え、山崎弘泰の子弓雄の誌と、その弟弓束の書により、明治三十年一月に四名の発起人「大池真澄・山崎弓雄・佐藤泰助・吉島休兵衛」と三名の補助「熊野弥兵衛・住民平・藤井周助」他に、賛成者筆頭「永田吉右衛門」以下九十一名の名が書いてある。

宮内大臣正三位勲 一等男爵波多野敬 直題額

石根古、しき飛驒の国に早々より國つ學の古き道をふみ開きて高山の里の高き功あると
荏野翁田中大秀大人なり大人の著して書はいく多くある中に物語の祖というなる竹取物
語の解をしも初學の人にもまつ讀うれらひてこの道に入り立つ栞とはじめ大人が神を敬ひ
國を思ふ心の厚かりしは此処荒神社又は旧蹟をたずねてあらば社殿を再建しあるは石文
を立てあるは考證逆書を物せられしめても知るべし其の外雅楽を始として有識故實の事
にもいへり深くひたふるす古の道を弘めんと真木柱立てて心は一寸しに動す数多き教子
を教へ導かれけり去年の秋かたなりと

今上陛下は大禮を行營せ給ひし時普き大御惠の波は深山路の奥にも及びて大人に正五位
の位を贈られ給へると高山の里の譽飛驒の國の誇にしてやがてそ學の路の光にとありけ
る大人の世に在しし日夢の中に百数の大庭に参りて親しく大御言を賜はると見しことあ
りそは弘化二季の冬の頃なりきといふそれより六十餘年を経て見し夢の現し事となりぬ
れは大人が真心の天に通したりとやいふへき同々學の流を酌む身のうれしさに黙しもあ
へ御請はるゝまにゝ其の由遺記しつ

大正五年四月十日

従四位勲三等文学博士芳賀矢一

湯萬年刻

田中大秀翁は幼名紀文通称弥兵衛と云へり安永六年八月廿八日飛騨
國大野郡高山に生る父を弥兵衛博道といひて
吉城郡

藏柱村の領主姫田そふの裔なりしとよ〇〇そ利を見よ

〇〇〇〇〇〇尾張へ栗田知周翁京より伴蒿蹊翁にして

比後又鈴屋本居大人の教子なり国学を究しなら

神の道を主唱し式内荏名神社の花くにあるすつ〇〇無御社を

再興し傍らに千種園を営み〇〇〇

田中大秀大人之碑 山崎弓雄謹誌

大前に在へ

（以下解読不能）

明治三十年一月 山崎弓束建

湯萬年刻

【立田万年】たつ たまんねん

明治二年（一八六八）十二月十八日生、昭和十五年（一九四一）五月十二日没

石工の名人・神職。河合村（飛騨市）角川生れ。旧姓は湯畑。号は湯万年。初名を梅之助。重義とも名乗る。

坂上村の立田家を継ぐ。二二歳で上京して彫刻師の岡田広次に入門し、石材彫刻の皆伝を受け帰郷。

養老公園碑、七卿西竄記念碑、和宮和歌碑は三大傑作とされる。手掛けたものは八十を超え、飛騨においては皇威輝八鉦岩碑、田島春園歌碑など六十に近い。

【飛騨人物事典】

【山崎弓雄】やまざき ゆみ お

生年不詳、明治三十年（一八九七）一月二十日没

歌人・地役人・神職。山崎弘泰の長男。幼名は冬吉、後に貫一。号は櫻桃園・蕃田翁。父に国学を、田中大秀に国学と和歌を学ぶ。

文久一年（一八六二）父の後を継いで荏野文机を受け、墨縄会を設けて門人を指導。高山の地役人、高山県の文学係と京都詰めなどを歴任。

著書に「蕃田歌文集」。

享年六十四。

【飛騨人物事典】

やまざき ゆづか

【山崎弓束】

安政二年（一八五四）一月生く明治四年（一九一〇）一月七日没

上枝村などの戸長・中学校教員。高山の人。山崎弘泰の二男。飯田年来に学び歌文をよくし雅楽を好む。能書でもある。戸長、神職を経て斐太中学、葦崎中学などの教師。著書「俗語辞解」。

【飛驒人物事典】

【荏野文庫】
えなぶんこ

田中大秀の江名子荏名神社境内に設けた文庫である。

文化年間式内荏名神社を再興し、自ら神官となり、此処に居住して家を千種園と呼び、一生国学の研究に没頭せられ、文庫内に多くの著書及び蒐集の書籍を納められたものが、没後何時しか其の全部を庫内より持出された。

大正元年（一九一三）文庫の遺書約一千四百冊を高山市教育会にて購入し、其後寄贈者もあり、香木園文庫目録を作製して研究する人の便に供している。

【高山市史下巻】

たなかしょうけい

【田中松慶】

生年不祥く没年不祥

京都の仏師。田中大秀に自像の彫刻を依頼され制作。像は天保十年（一八三九）八月二六日高山届く。荏野文庫土蔵に安置

【飛驒人物事典】

(カ) 道分灯籠



(北面)

左 江戸

みのぶさん
ぜんこうじ
道

献灯

荏名神社大前

行列の見事乗鞍かさが岳

やりさへ高くふれるしら雪 秋宜

天保壬辰

菊田 秋宜

春三日

荏名神社の前、江戸街道と村道との分岐点にある菊田秋宜の建立した風流な灯籠である。棹石の四面に前掲の文字が刻まれている。

狂歌は北アルプスの山名をもじって大名行列に仕立てた趣向、身延山は山梨県にある日蓮宗久遠寺、天保壬辰は天保三年（一八三二）である。

きくたあきよし

【菊田秋宜】

生年不詳、嘉永二年（一八四八）十二月十八日没

飛騨郡代の大井帯刀の元締め手代。名は泰蔵・賢揚・日心。号を歌匠堂口弘。在任中に起こった二回の大飢饉の救民や、高山大火被災者の救済などで郡代を助け社会事業に尽くす。

能書家で狂歌も巧みで戯作にも長じる。城山にある「白雲山桜花の碑」を建てた一人。荏名神社前には道分け灯ろうを建立し自作狂歌を刻む。

戯作に「山犬物語」がある。

【飛騨人物事典】

(キ) 田蓑の碑



富田令禾。題字は、文化勲章受章者の牧野英一。田蓑は「ばんどり」といった。つい近年まで、広く使用されていた。加藤源十郎は陶工であるが、製陶のかたわら、村人に田蓑の製法を教えた。

江名子町の北入口、狂歌の道分灯籠（前出）と向き合っている。

江戸初期に、田蓑の製法を伝授した加藤源十郎の徳を偲んだものである。表の文は、田中大秀の「加藤源十郎記」の抄出、和歌二首が入っている。天保十年（二八三）の作。書は、

江名子
田蓑祖
源十郎
翁之碑
牧野英一

久方の雨のふる日も田蓑きて民のたつきの
怠りぞなき

蓑つくる業を教へてなりはひをたすけし人
の恵をそおもふ

かとうげんじゅうろう

【加藤源十郎】

生年不詳〜元禄二年（一六八九）三月二十日没

製陶業・江名子ばんどりの始祖。

尾張あるいは京都の人といわれるが不明。寛文年間（一六六一〜七三）に金森頼直の招きで飛騨へ入り、江名子村瀬戸ヶ洞で源十郎焼を始める。ヒビ焼の風雅に特徴があり広く珍重される。大隆寺住職の乾舟妙一が度々訪れて絵付けをする。荏名神社に狛犬が残る。村人に田蓑作りを教え「江名子ばんどり」と呼ばれる。

【飛騨人物事典】

まきのえいいち

【牧野英一】

明治十一年（一八七八）三月二十日生〜昭和四五年（一九七〇）四月十八日没

刑法学者、高山市名誉市民。高山町上向町出身で神奈川県茅ヶ崎市に居住。良三の兄。斐太中学、東京帝国大学法学部卒。法学博士。

東京地裁判事などを経て明治四十年（一九〇七）東大助教授、大正二年（一九一三）教授。この間明治四三年（一九一〇）からヨーロッパに留学し、近代派刑法学の論理を学んだ。「刑は教育のためである」という教育刑主義で大きな影響を与えた。昭和二十一年（一九四六）貴族院議員となり新憲法の制定に携わった。公職適格審査委員長として公職追放の実施に当たった。佐々木信綱門下の歌人でも評価が高かった。

著書「日本刑法」「刑法研究」ほか。

文化勲章（昭和二五（一九五〇））。初の高山市名誉市民（昭和三三（一九五八））。勲一等瑞宝章（昭和四十二（一九六七））。従二位（昭和四五（一九七〇））。

【飛騨人物事典】

(ク) 錦山沿革碑



空町の東、錦山の頂上に、御嶽教日輪教会が建てた石碑である。

碑面には、

（文章略記）

「昔、里人は、この山を雨乞山としていた。靈験は顕著であつた。永正年中飛驒国司となつた姉小路基綱卿が、飛驒八景を選んで歌を詠んだ中にこの山が入っている。

そむとては人のくにもしくるらめ

からの錦の山のもみぢ葉

天正十四年、金森長近は飛驒平定後、すぐこの山に登って、御岳と日輪を拝し、祠を建て道場とした。後、荒廃していたのを、日輪教会が再興したものである。昭和廿六年より五か年間、五千人の奉仕による」

(ケ) 吟風句碑



淡雪や 鳥の旅

志ばしの内の

吟風

東山宗猷寺の境内に、山岡鉄舟の父母の墓碑がある。その北西隅に建つ柱状句碑が「鈴木吟風」のものである。

西宮へ転勤させられた。追放とも左遷とも、飛騨人に受け取られて、これも大原騒動の一因になった。天明二年（一七八二）同地で没。

吟風の友人たちの手で、その年にこの碑が建てられた。彦四郎が亡くなって、その子亀五郎が郡代になった翌年である。

（南側正面）

雲南亭主人墓

（西側正面）

鈴木主諱○規字于準高山人鈴木其姓○雲南亭主人又號
吟風世為 本州府屬吏明和七年徒為攝州西宮○○○○
酒萬行革迎書去於東都三井○○○又好俳歌○為人風流○
藉所在著名天明二年十二月四日以病沒實春秋五十○五
稽山本有同僚之奸○豈魚之○○○以高山是其○○○也魂而
皆知○不思慕焉遂立石於真龍岳

（右側に続いて）

○衣問○川共○○○為之笠○○○其故人大坪○○○助裏事互
○○○一句ツ題○陰○○○○○靈其○○○依畝○天明丙午
冬十二月四日友人田○○○記○書

【鈴木唯七】
すずきただしち

生年不詳、天明二年（二七八二）十二月四日没

高山の地役人。名は栄規。字は子準。号を吟風・雲南亭主人。

明和七年（二七七〇）二月五日、鈴木ら六人は摂津西宮へ転勤を命ぜられる。世評では、六人はいずれも優秀な地役人だったが、大原代官の私欲の行動を批判したためだとされる。

書をよくし俳句を好む。

享年五五。

【飛騨人物事典】

(コ) 松浦家墓



東山宗猷寺の中段北にある。

(裏面)

亡き親にしのぶが露の

こまとめし○○○けかけて

家を○○○○潮

(右面)

たらちねの母○きの大樹も

奈どかにいれるか丘の

露の○さ潮

まつうらうしお

【松浦潮】

明治十三年（一八八〇）十一月二日生、昭和二六年（一九五二）七月十日没

「飛驒日報」創刊者。高山市上三之町の人。本名は儀一。

明治四三年（一九一〇）から雑誌「言葉の花」（大正二年（一九一三）「飛驒」と改題）を発行。大正五年（一九一六）飛驒初の日刊誌「飛驒日報」（飛驒毎日新聞の前身）を創刊。昭和十年（一九三五）新愛知新聞社飛驒支局が開設され、支局長に就任。

著書「飛驒人物考」。

【飛驒人物事典】

(サ) 加藤家三代句碑



鷹すえて
柏翁
待や日の出の
大け
八十五翁
しら羅老人
しき
機の音更て
師走の天の川
雪や松
かけも形ちも
消えぬべし
七十翁
麴翁

東山法華寺の本堂と向き合って、人間が腰を少々ひねった形の石碑が、歩簫・李充・麴翁の句碑である。

(裏面)

加藤氏歩簫蘭亭と號し飛驒俳壇の中興たり子李充孫
孫遶翁相繼いて雲橋社の宗匠を以て世に著る明年簫翁
百年忌辰の爲め可玄孫加藤專一その父拳石の遺志を○
て三祖考の句碑を建て其靈を慰む又同時に三翁の遺稿
を出版してそか記念ともなさむとす 時に大正十四年
七月十五日親戚押上森藏其由を誌す

湯満年刻

かとう ほうしょう

【加藤歩簫】

寛保三年（一七四三）四月生く文政十年（一八七七）十二月十四日没

雲橋社中興の俳人で五世。高山二之町生まれ。玄俊の子。名は貴雄。通称は小三。号を蘭亭・志羅々翁・白翁・里秋。

五升庵蝶夢に俳諧を、伴蒿蹊に国学を学ぶ。父の私塾を継いで、田中大秀、赤田臥牛ら多くの俳人・学者を輩出。文化十三年（一八二六）西茂住の山峡に俳人・野沢凡兆の遺詠地を探して岸壁に「鷺の巢の樟の枯枝に日は入ぬ」を著し彫らせる。

図書千冊余を収集して「雲橋社文庫」を開設。これは飛騨初の公開文庫。昭和二年（一九二八）に従五位を追贈される。墓は東山法華寺。

著書「紙魚のやとり」「ゆきさきの旅つと」「蘭亭尚齒卷」「よしなし草」など。

【飛騨人物事典】

かとう りじゅう

【加藤李充】

安永七年（一七七八）十二月二日生く嘉永二年（一八四九）四月二五日没

雲橋社七世の俳人。高山二之町村の人。歩簫の長男。幼名は太次郎。通称を正次郎・小三郎。名は清雄。号を蘭亭李充（戎）・柏翁。

書道、国学、雅楽を好み特に飛騨の雅楽振興功績を残す。

【飛騨人物事典】

かとうぎょうおう

【加藤越翁】

文政六年（一八二三）七月六日生、明治三四年（一九〇一）三月一日没

雲橋社八世の俳人。高山の人。加藤歩簫の孫。幼名を仙太郎、後に正次郎。通称得三郎。名は不雄。号を荷肅・羅耳亭・蘭亭珂咲。

田中大秀に雅楽を学び和歌も好む。

【飛驒人物事典】

ごしょうあんちようむ

【五升庵蝶夢】

享保十七年（二七三二）生、寛政七年（二七九五）十二月二十四日没

俳諧作者。京都生まれ。別号は泊庵・睡花堂。

芭蕉顕彰史上の功績者。伴蒿蹊と交わっていた関係で、蒿蹊の教えを受けた加藤歩簫と交流。雲橋社に伝わる粉本「芭蕉翁絵詞伝」の作者でもある。

【飛驒人物事典】

のざわばんちよう

【野沢凡兆】

生年不詳、正徳四年（二七二四）

俳諧師・医師。加賀国金沢生まれ。名は允昌。号は加生・阿圭。蕉門十哲の一人。

元禄四年（二六九二）越中中街道から箆の渡りで飛驒へ入り、西茂住の妻の上の道をさまよい「鷺の巢の樟の枯枝に日は入ぬ」の句を残して引き返す。

去来と共編の「猿蓑」ほか。（飛驒百景）

【飛驒人物事典】

【雲橋社】

幕末紛乱の世に際し、雲橋社の耆宿前後調謝して、社運漸く哀頽に傾いたが、加藤遯翁独恬淡として社童と共に残燈を守り俳諧の維持に努めて来た。斯くて明治初期を過ぎて文運漸く振興し、桃村・周可・小湖・柄齊等相次ぎて社中の人となった。

明治十九年福田蕉滴県会議員として岐阜市に往来したが、時の知事小崎我々亭蕉滴に勧めて獅子門道統第十七世棚橋碌翁の門に入らしめた。爾来蕉滴・原長松・上木可中・日下部雨外・古島夕景・柿下得園・野中井蛙等と語らい瓢箪会を組織し、時々俳筵を開いた。

然かし適当な指導者がないので、遯翁に請いて雲橋社第四世の立机式を挙げしめた。

奥村野秋歿後雲橋社文机空しく庫中に藏せられること茲に三十二年、終始正風俳統を死守して来た遯翁・掃月の功績を思わねばならない。明治二十四年十二月二十四日可中庵に於て瓢箪会の納会を開き、席上掃月・雨外を双方の代表とし、瓢箪会を雲橋社に併合する議を決し、爾来毎月二、三回俳席を開いて研究を継続した。

【高山市史下巻】

(シ) 加藤千歩句碑



東山法華寺に、昭和五十七年十月建碑。この寺には、加藤家累代の墓も、加藤家三代句碑（前出）もある（両碑並ぶ）。

雲の行く方に
路あり
枯尾花
蘭亭
千歩

(裏面)

正名生門にて社翁会全をむ
六位市斐校生山第その教域建
蘭民太に虫し十の文信し立
亭た中學學加一生成化望
千り學びに藤世涯福を以
歩校内於病宗を祉一て
加明科院匠通等身そ
藤治經學をはとじ遍にの
專二て小一開しく聚遺
十一児權設て医仁む徳
翁七立科威の文界道を
は年志學た傍机をは茲を
、三千をりをも貫に翁縁
又月葉專、俳繼と翁の
高山十医攻故統承よの
山三學、あ雲すり飛句も
市日專殊っ橋。社驛碑せ

昭和壬戌

記 神無月
後進

加藤於菟丸

(ス) 本名不明の墓



東山法華寺、上木雨夕の墓（後出）の北方。加藤光正墓の右道右。

ゆふだちやここハ
志^しばしのかりの宿

(西側正面)

玄節融明壽徳

(南側面)

文化十癸酉四月廿三日



(七) 上木雨夕墓

東山法華寺、墓道右側五段目くらい。

ちぎり
おく
後世の
しをりや
いしの
つゆ
雨夕

【上木雨夕】
うわぎ うせき

生年不詳、明治十三年（一八八〇）八月二十九日没

俳人。高山の人。名は政脩。通名を小四郎。常徴の五男。
仏典に通じる

【飛騨人物事典】

(ソ)

楠木・三原夫妻碑



昭和四十六年（一九七二）十月十六日、高山市文化協会主催による文化講演会「音楽と人生」を開催された、講師の作曲家高木東六先生が、講演後に楠繁夫・三原純子夫妻が高山に縁あることを知り、東京の音楽家仲間の拠金で石碑を建てたいと提唱され、三原純子の姉が嫁いでおられる本教寺を案内、その事を伝え、たまたま東山に在る本教寺所有の墓地用地を提供する事を快く了承されたため、この碑が建った。

この碑の除幕式には、脳卒中で体調を崩していた作曲家古賀政男さんが列席し、アコーディオンが奏でる「南から南から」の曲を、涙を流して聞き入っていた姿が印象的であった。

くすのきしげお

【楠木繁夫】

明治三十七年（一九〇五）一月二十日生、昭和三年（一九五六）十二月十四日没

歌手。高知県佐川生まれ。本名黒田進。県立中学校時代に音楽家を志す。大正十二年（一九二四）東京音楽学校（現・東京芸術大学）師範科の本科声楽部に進み、梁田貞に師事した。学生時代は、同級の高木東六（作曲家）らと行動を共にしていたが、昭和三年（一九二八）学生運動で校則に反し、高木らとともに除籍処分となった。名古屋にあったツルレコードに「五月音頭」を吹き込み、レコード歌手として活動を始める。

昭和九年（一九三四）に作曲家・古賀政男を重役に迎えて間もないテイチクの専属になる。昭和十年（一九三五）には、古賀政男とのコンビで「白い椿の唄」「緑の地平線」他大ヒットが続ぎ、一躍大ヒット歌手となる。その後ビクターに移籍した後、古賀政男の誘いでコロムビア移籍後に「歌う狸御殿」で共演した歌手三原純子と昭和十八年（一九四三）末に結婚した。昭和二十一年（一九四六）の春に夫婦揃ってのステージを名古屋で努めたのが最後となった。

みはらしゅんこ

【三原純子】

大正九年（一九二〇）八月六日生、昭和三十四年（一九五九）十月三日没

歌手。白川村生まれ。木村奥左衛門の二女。楠木繁夫の妻。本名は黒田粹子。高山女学校卒。谷愛作に声楽を学んだ。タイヘイ・レコード専属歌手として昭和十四年（一九三九）「帰ろう帰ろう漢口へ」でデビュー。

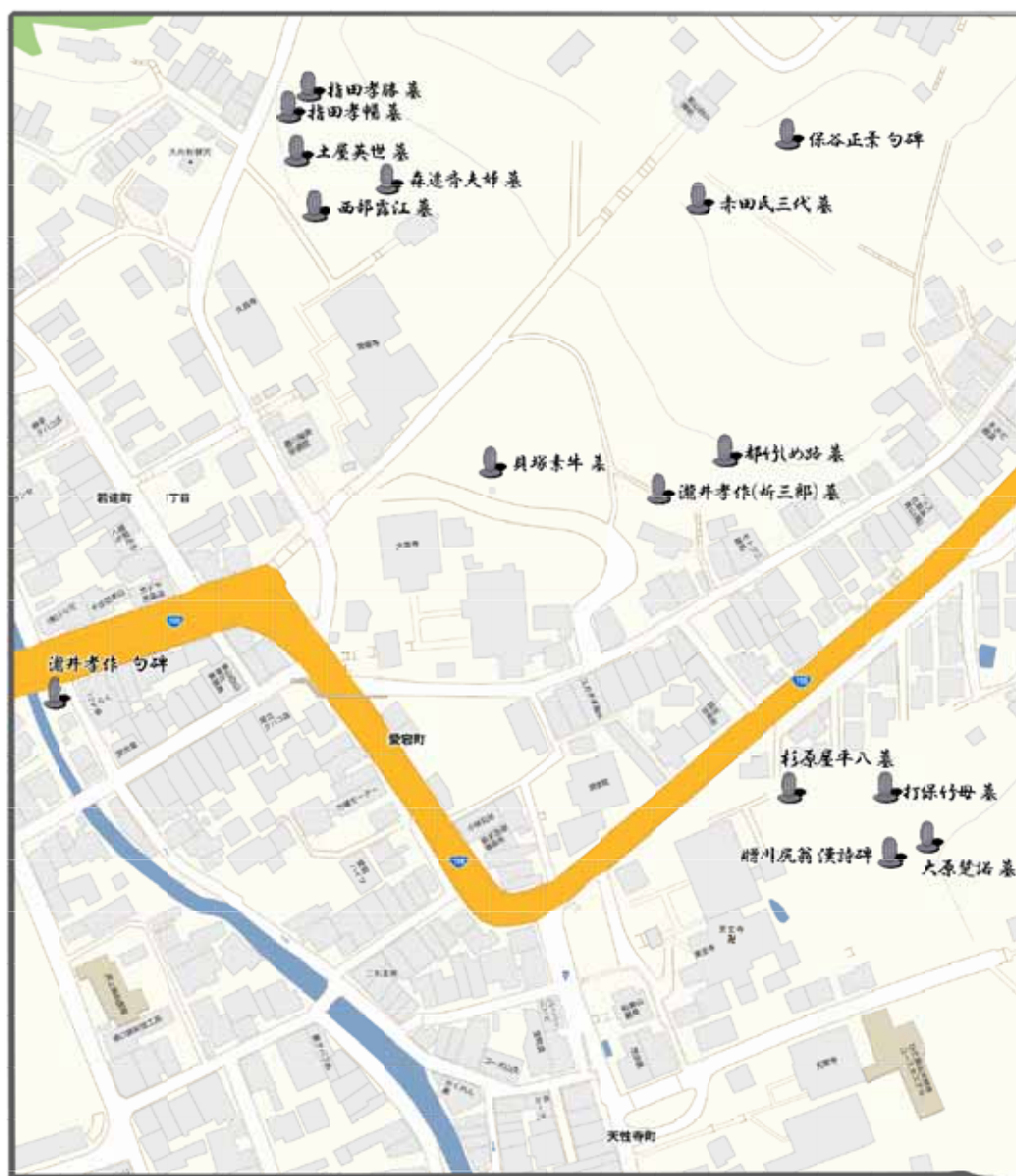
昭和十六年（一九四二）コロムビア・レコードへ移り「南から南から」がヒットしてスターとなった。高山市内で死去。

【飛驒人物事典】

(夕)

東山 文学碑位置図 その二

句碑・墓 位置図



(チ) 贈川尻翁漢詩碑



東山素玄寺上の墓地に有る。大原彦四郎郡代の墓の前。

贈川尻翁松塘釣史

嬰鑠斯翁髮鬢雪七旬釀法
○仙○宮川流水清如酒不
及君家醇味洌

明治廿三年五月吉城代書

岡田廣次鐫

かわじりはるすみ

【川尻吏恭】

生年不詳、明治二十二年（一八八九）9月二十六日没

経済人。高原郷釜崎村の人。旧姓は吉村で高山の福田家（歌人夕咲の家）の女婿となり、福田家の本姓である川尻を名乗って一家を興す。

詠歌を楽しみ田中大秀に学ぶ。享年七十六。

【飛驒人物事典】

(ツ) 大原彦四郎墓



東山素玄寺墓地であるが、愛宕神明神社の参道中程左側の、土蔵のところから入るとすぐ判る。大きく高い。西向き。

法華經の功德を梅に初音かな
涼しさや高山よりも死出の山
蓮の実や飛出した数珠の尊さに
極楽の迷い子寒し雪仏

おおはらひこしろう

【大原彦四郎】

生年不詳、安永八年（一七七九）九月二十二日没

十二代飛騨代官（後に郡代）。名は紹正・継正。号は清流亭楚諾。

明和三年（二七六〇）五月十日に江戸勘定奉行所の御勘定組改役から着任。飛州御用木元伐休止や年貢金納の繰り上げ、検地、永久石代定値段の強要などによって大原騒動を惹起。獄門、遠島のほか過料を含め処罰者約一万人という、日本一揆史上稀にみる膨大な犠牲者を出す。一揆の鎮圧と検地の完了により郡代に昇進。妻は夫の酷政を諫めて自害。

俳諧を好み俳壇水音社を興し初代宗匠。安永七年（二七八）に失明。享年推定五十歳。

【飛騨人物事典】

【俳諧結社 水音社】

すいおんしゃ

第十二代飛騨代官（後郡代）大原彦四郎紹正は、俳諧を好んで清流亭楚諾と号し明和三年（二七六〇）同志と共に俳壇水音社を高山に興し、第一世の宗匠となった。同七年俳集「鳥の跡」一卷を刊行した。

安永騒動以後水音社は一時振るわなかったが、近藤一左・平瀬東有・小野柳永・代情順教等によって幕末頃迄続き、明治時代絶えたが、上木雨台に依って再興された。

【高山市史】

うわぎ うだい

【上木雨台】

生年不詳、大正二年（一九一三）六月二十九日

製糸業・俳人。高山の人。政脩（雨夕）の長男。名は元彦。号は雨易・聴松。通称を小四郎。家は代々郡代官所の御用菓子司。養蚕製糸の改良に尽くす。片野地内で水車と蒸気機関を使用し百人繰の魁産社器械製糸場を興す。

中絶していた俳句結社「水音社」を再興し六世宗匠。享年六九歳。

【飛騨人物事典】

(テ) 杉原屋平八墓



東山素玄寺裏山。墓地下段。

飼ねこの綱ふし 善六

ほどくひがん哉

文化十一年(一八四四)建

(ト) 清水久六墓



辞世

竹
母

なにごころ

とどめむ秋の

月も入

東山素玄寺。大原彦四郎墓の北西下。長坂
の見える端の方。寛政七年（一七九五）建。

うつばちくも
【打保竹母】

生年不詳〜寛政七年（二七九五）八月十一日没

俳人。高山の人。通称は打保屋久六。名は清水久六。号は繁山・竹山・竹茂。庵を鳳仙居と呼ぶ。加藤歩簫が俳句結社「雲橋社」を創立するに際し、雲橋社に什宝を集めるため広瀬其川、二木歌夕と協力する。

晩年は隠居して美濃路、九州地方を旅行し天明二年（二六三）十二月『つくしみやげ』一卷を刊行。享年七十四。

【飛驒人物事典】

ひろせげんしち
【広瀬源七】

生年不詳寛政十年（二七九八）十月八日没

商人・俳人。高山一之町の人。号は菊花堂・其川・其流。通称を源右衛門。寛政四年（二七九二）三月に東本願寺の飛州給木伐採川下に関する肝煎となる。雲橋社の芭蕉翁像開眼の俳筵を京都金福寺で開くに当たり、同社を代表する等功労があった。遺句集『筆の種』。享年五十。

【飛驒人物事典】

にきぜんざぶろう
【二木善三郎】

生年不詳〜文化八年（二八二二）二月十八日没

俳人。高山の人。号は歌夕。屋号を加賀屋。寛政四年（一七九二）三月、東本願寺の飛州給木伐採川下に関する肝煎となる。田中屋下代として奥州盛岡で山林木の伐出を世話し、同地で死去。横笛をよくする。享年六十二。

【飛驒人物事典】

(ナ) 都竹しめ路墓



夢の世を呑みあかしたる盃を

石碑になれど今もいたたく

ゆめ覚めて此の世に残る物としては

家名法名石碑なりけり

志め路

一すじに把るや

月の酒涼し

湖花

大雄寺墓地、長坂寄りにある。

(二) 貝塚素牛墓



大雄寺墓地。田口郡代墓に向かって右隣にある。

白山花之碑
雲桜

今はむかし貝塚翁の此国につかへまつられけるとき此処の
ひとひとはかりてこの尾の
うえに手つからも人して
も桜木のおほく植ゑられける
かいまもいとめでたく
さかえたりけるかの翁のみ
やびたる志をおきてこ
たい
またさらにあまたの苗う
ゑ
そへそのかみくちすさ
まれくる翁の
句を石にゑりつけてのこして
とてかくはものしつ

植えてなほ花に命のをしきかな 素牛翁

(以下略)

かいづかぶんじう えもん
【貝塚文次右衛門】

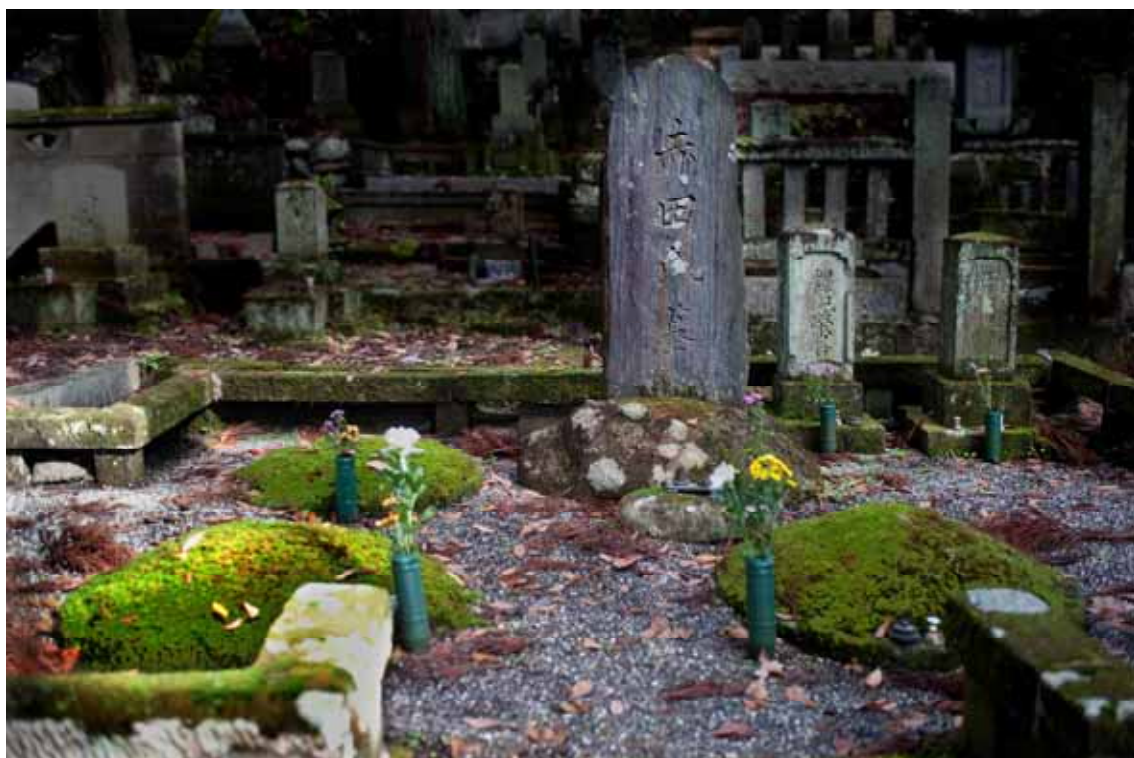
生年不詳、文化七年（二八一〇）八月二十九日没

飛騨郡代の元締手代・俳人。名は典寛。号は素牛。文化二年（二八〇四）に郡代の田口五郎左衛門に従って着任。高山の城址（城山）が荒廃しているのを嘆き、有志と桜を植え観花場を開く。

後の郡代・大井永昌が貝塚の句碑「植えてなほ花に命のをしきかな」を白雲山に建てる。墓は大雄寺。

【飛騨人物事典】

(又) 赤田氏三代墓



大雄寺墓地内。東西三・六メートル、南北五・五メートルの墓域内に石塔三、古墳四が配置されている。

臥牛墳は入口に最も近く、中央に位置し、右に先霊、左に誠軒（嫡孫）、後ろに章斎（嫡子）の墳墓がある。各墳墓とも同大で、環石を設け、中に盛り土がしてある。

誠軒の遺骸は大正十五年小糸坂からここに移された。

あかた がぎゅう

【赤田臥牛】

延享4年（一七四七）生、文化五年（一八三二）七月二十二日没

儒学者。高山一之町の人。初名は朱義、後に元義。字は伯宜。通称新助。号を臥牛山人、白雲山樵。酒造家の生まれ。信長に敗れた六角義弼の将・赤田信濃守の子孫という。

勝久寺の瑞雲雪峰に論孟と五經の句読を受ける。津野滄州は臥牛の才能を惜しみ尾張の松平君山、浅井凶南、江戸の宇野明霞、館柳湾（飛騨郡代の元締手代で詩人）などに紹介した。これらに師事した臥牛は飛騨において不動の地位を築く。

江村北海（江戸中期の漢詩人）の『日本詩選』（安永二年（一七七三）に詩四首が載る。文化二年（一八〇三）には官許を得て自邸に「静修館」を開く（飛騨地方での学問所の初め）。皇室を尊ぶ気が篤く津野滄州と図って「箆の渡し」と「藤橋」の二図を描き、管原長親を経て天覧に供し、その光栄を喜び「懸度行」の長詩一編を発表。著書『臥牛集』。

【飛騨人物事典】

あかた しょうさい

【赤田章斎】

天明四年（一七八四）生、弘化二年（一八四五）九月二十九日没

儒学者。赤田臥牛の嫡子。名は光暢。字は永和。通称を新助。幼名は貞吉。鉅埜逸民・公茂と号する。

臥牛の教えを受け、文政一年（一八一八）から父に代わって静修館の教授。天保三年（一八三二）十一月の大火で静修館が焼失したため高山馬場通り海老坂上に再興し、飛騨国中教授所として郷村を巡回教授。弘化一年（一八四〇）九月には神明町角に移築。詩文、絵画にも優れ敬神の念が篤かった。

花里天満宮に本人の識した退筆塚がある。

【飛騨人物事典】

あかたせいけん
【赤田誠軒】

天保二年（一八三一）七月生、明治六年（一八七三）五月二十七日没

高山県の学問教授方。章斎の嫡子。名は○・商衛。字は伯瓊・子黄。通称を新助・晋助。明治一年に瑛次郎、三年に雌雉五郎、四年に○次郎と改名。

父祖の業を継いで嘉永三年（一八五〇）十九歳で静修館において「左氏伝」を開講。明治一年（一八六八）、高山県知事の梅村速水から学問取締方を命じられたが、梅村の治世方針に合わず館を閉じ、平泉瑛次郎と改め、川原町の村瀬恒右衛門方に同居し素読指南に従事。その後古川へ移住し加賀、能登へ遊学。病を得て高山に没する。著書多数。

【飛騨人物事典】

しょうきふざうじぜんずい
【勝久寺善瑞】

生年不詳（一八三二）～明和三年（二七六六）八月一日没

高山市の勝久寺九世。雪峰と称する。上京して宗余乗を研究し名声があった。赤田臥牛の幼少時の師。享年九十

【飛騨人物事典】

つ の そう し ゅ う
【津野滄州】

享保三年（一七一八）～寛政二年（一七九〇）七月二十三日没

養蚕功労者・石器収集家・酒造業・糸問屋。高山二之町の人。名は義見。号は蒲公英主・金華主人・金華三愛主・〇徳斎。字は有鄰。通称を福島屋五右衛門。

飛驒の養蚕振興のため三河で蚕の飼育方法を習得して帰り、飛驒各地で指導。さらに三河などから蚕種や桑苗を求めて無償で配布。こうした私財を投じた努力が実って、飛驒の生糸と紬の生産額は五十倍以上になる。この功により名字帯刀を許される。詩文、俳句、狂歌をたしなむほか石器収集・研究の草分け的な存在。

著書『金華三愛集』『飛州燕石録』ほか。

【飛驒人物事典】

たちりゅうわん
【館柳湾】

宝暦十二年（一七六二）三月十一日生～弘化二年（一八四四）四月十三日没

江戸中・後期の漢詩人。越後の人。通称は雄次郎。号は石香斎。字を枢卿。寛政十二年（一八〇〇）四月に飛驒郡代・小出大助の元締として着任し、文化一年（一八〇四）退任。赤田臥牛らと交わる。著書『柳湾漁唱』には飛驒での作品が多い。

編著『林園月令』。

【飛驒人物事典】

せいしゅうかん
【静修館】

赤田臥牛幼より学を好むも郷党師友なく出遊せんとするも父其遊行を喜ばなかった、津野滄州（高山人）之を憫み為に尾張の松平君山・浅井図南・近江の龍草蘆等と通交せしめた、是より名声漸く著はれた、臥牛年長するに従い学識益々進み、郷人多く其の門に入った、郡代田口五郎左衛門幕府の許可を得て臥牛の居宅脇に学塾を建てしめた、静修館即ちこれである。

文政一年（二八八）から父臥牛に代わって、章斎が教授、天保三年（二八三）十一月大火で静修館が焼失したため高山馬場道り海老坂上に再興した。弘化一年（二八四）九月には神明町角に移築。誠軒は父祖の業を継いだ、明治一年（二八八）高山県知事梅村速水から学問取締方を命じられたが、梅村の治政方針に合わず静修館を閉じた。

【高山市史】

(ネ) 保谷正葉句碑



大雄寺墓地。最上段。

草にねて春の雲追う

背のぬくみ

正葉

ほうやまさたろう

【保谷政太郎】

明治三十二年（一八九九）九月七日生、昭和六十二年（一九八七）十一月二十日没

（資）大六印刷所創業者・俳人。高山市相生町の人。号は正葉。高山尋常高等小学校卒。

昭和二年（一九一七）大六印刷を開業し、二十三年（一九四八）（資）大六印刷所と改めて代表社員。水音社の俳人。飛驒印刷組合集団責任者、高山商工会議所議員、高山信用金庫理事など歴任。

句集『人生の旅』一、四集。岐阜県印刷工業組合表彰（昭四十三（一九六八））

【飛驒人物事典】

(ノ) 森遷齊夫婦墓



雲龍寺墓地中央に変わった形の墓石がある。表に夫妻の法名、斜横に俳句が刻んである。

華○恵遠○をこほよめる時

花の嫌ふ嵐おき来てけふの月

鵲樹女

もりとよなお

【森豊直】

生年不詳弘化四年（二八四七）八月二十一日没

眼科医。高山生まれ。大阪屋（森七）の人。通称は庄右衛門。妻は鵠樹。医師となり名を遷斎と改める。

文政十二年（二八二五）十一月に尾張へ出て本道外科などを学んだ後、尾張藩本丸医師・土生玄昌らに眼科を修業。同藩医となって一段席に進む。名古屋長者町で東都土生流眼療○樹園を開いて治療に従事。天保十四年（二八四三）本居内遠に入門して国学を学ぶ。のち高山へ帰る。

著書『森家秘法眼療術』

【飛騨人物事典】

(八) 土屋英世墓



雲龍寺墓地下部中央辺り。

あすよりは主なきやとならんとも
しらてや招く庭のほすゝき 秀世

つちやひでよ

【土屋秀世】

生年不詳、弘化四年（一八四七）八月十八日没

高山の地役人。本姓は川上。号は雪園。勘左衛門と称する。

田中大秀に就いて国典、歌文を修める。著書『官材画譜』、郡代の命で白山へ登った紀行『山わけ衣』。享年四十七

【飛騨人物事典】

(ヒ) 西部露江墓



雲龍寺本堂近く、墓地下道すぐ上。

蓮ちるや爰をさる事 露江

遠からず

にしべろこう

【西部露江】

生年不祥、宝暦三年（一七五三）十月二日没

俳人・地役人。名は俊英。通称は半助。

雲橋庵三世宗匠。享年四十一歳。

【飛騨人物事典】

(7)

指田孝暢、孝勝墓



明けくれの友と聞にし松風の

おとさへ雪にうづもれにけり 孝暢

安政五戊午年正月十八日卒

われしなはわかなき霊はこむ秋の

末野の尾花まねきてやあらん 孝勝

明治八年戊亥二月三日歿 行年七十一歳

雲龍寺、墓地下の三福寺街道が峠にかかる南部下部。北向き。
西側に孝勝の歌。東側に孝暢の歌。

さすだたかかつ

【指田孝勝】

生年不詳／明治八年（一八七五）二月三日没

高山の地役人。名は織之助。本姓は益田郡下原郷の加藤で指田家を継ぐ。

地役人頭取を慶応四年（一八六八）に辞職。田中大秀に歌を学び画は市村鳳頂に山水を学ぶ。

【飛騨人物事典】

(へ) 瀧井孝作(新三郎)墓



大雄寺墓地。瀧井新三郎の墓に葬られている。

(ホ) 瀧井孝作句碑



短夜の
鐘のねいろに
目覚めけり
孝作

若達町宝橋詰。高山市が「伝統的文化都市環境保存地区整備事業」まちかど整備事業の一部として、その区画を整備。

たきいこうさく

【瀧井孝作】

明治三七年（一八九四）四月四日～昭和五九年（一九八四）十一月二十一日

小説家・文化功労者。高山市空町（現大門町）生れで東京都八王子市に居住。号は折柴。

河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年（一九一九）時事新報記者になり、このころから芥川龍之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛騨高山』などの短篇小説や随筆を次々に発表。昭和二年（一九二七）代表作『無限抱擁』発表。

『野趣』で読売文学賞（昭和四三（一九六八））。『俳人仲間』で日本文学大賞（昭和四十九（一九七四））。作品は「瀧井文学」と評され、トットツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年（一九三五）の芥川賞創設から五十六年（一九八二）まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛騨高山」の文字等六朝風の書法でも知られる。

日本芸術院会員（昭和三十四（一九五九））。高山市名誉市民（昭和四十六（一九七二））。文化功労者（昭和四十九（一九七四））。勲二等瑞宝章（昭和五十（一九七五））。八王子市名誉市民（昭和五十）。

【飛騨人物事典】

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十三年三月発行

編集 社団法人高山市文化協会